

教育福祉に賭した“一粒の麦” 石井筆子

石井筆子(1861-1944)は、近代日本の社会福祉史において、日本で最初の知的障害児教育施設滝乃川学園創設者石井亮一の妻として、亮一と滝乃川学園を支えたと評価されてきました。滝乃川学園は、濃尾震災で孤児となった女兒の救済施設孤女学院に端を発し、知的障害児は教育不能とする偏見が強い時代に、セガンをはじめとする欧米の第一線の研究成果に基づき障害児教育を展開した施設です。男爵渡辺清の娘であり華族女学校教師であった筆子は、孤女学院の時代から、亮一の営みを支援し、皇族や華族の社会的責務(noblesse oblige)の覚醒を導くと共に、みずからが校長を務める静修女学校の生徒達にも孤女学院を援助する機会を設けました。孤女学院や滝乃川学園、亮一の支え手という位置にとどまらず、福祉と教育のオルガナイザー的存在であり、第二代学園長として障害児教育とその障害児教育の職員養成を牽引した存在が筆子でした。

加えて、近年の研究において、筆子が、女子教育史や女性史においても、あるいは児童文学史においても注目すべき存在であることが明らかになってきました。

筆子は、日本で初めて創設された官立女学校の第一期生であり、近代日本の草創期の女子の学校教育を受けた存在です。二年近くのヨーロッパ生活を経て、1885(明治18)年には創設されたばかりの華族女学校の教師となり



● 礼服である袴姿の筆子(華族女学校教師を務めた頃と推定)

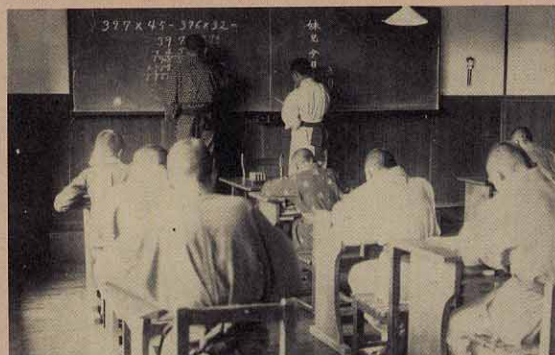
ます。当時は、年に6回程度「皇后陛下御臨啓授業」がなされていましたが、そのことを記録した「式事録」にも、筆子の担当したフランス語授業を確認できます。また、筆子は、大日本婦人教育会創設の労を担い、その機関誌においては「男と女の同権」を論じるなど、女性の地位に関する論者としても注目されます。さらに、アンデルセン童話の翻訳も行っています。そこでは、一般に「みにくいあひるの子」として知られる作品を「大器晩成」と題して訳すなど、子どもの成長を長い目でみつめる彼女の愛情深いまなざしを看取できます。

“一粒の麦”として教育と福祉に賭した筆子の生涯は、死して後、多くの実を結び、今を生きる私たちに命と愛を伝えています。

(二井仁美)



● 滝乃川学園本館(国登録有形文化財) 1932年竣工(現在修復中)



● 滝乃川学園の授業風景(1932年)

ミュージアム・レター第7号

2008年5月16日発行

〒171-8588

東京都豊島区目白1-5-1

電話 03 (3986) 0221

内線 6569

FAX 03 (5992) 9219

Gakushuin University Museum of History

学習院大学史料館

● ホームページもご覧ください

<http://www.gakushuin.ac.jp/univ/ua>